様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　3 月　4 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７３０４８０
研究課題名（和文）　排斥における集団移行可能性認知の影響

研究課題名（英文）The effect of groups' permeability of the group on the response to exclusion.

研究代表者
礒部　智加衣　（ISOBE　CHIKAE）
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：20420507

研究成果の概要（和文）：本研究では、排斥および排斥の観察が、集団評価（集団への愛着・集団成員への評価）に及ぼす影響を検討した。場面想定法による検討の結果、集団移行可能性が低いと見積もられる場合において、排斥の観察後に、排斥が行われた集団への愛着が高まることが示された。また、実験室実験による検討の結果、集団移行可能性が低いと認知している場合、排斥が行われた集団に対する評価が下がりにくいことが示された。加えて、これらの過程は拒絶感受性によって調整された。また、排斥後の初期的認知の検討では、参加者の性別・拒絶感受性によって表情刺激への反応が異なる傾向が認められたが、先行研究と一貫しない結果であった。

研究成果の概要（英文）：In this study, the effects of exclusion or observation of exclusion on group evaluations (evaluation of group attachment and group members) were examined. The results of a scenario experiment showed that participants increased attachment to the group after observation of exclusion, in the condition that they perceived groups' permeability low. In a laboratory experiments, participants did not tend to reduce the group evaluation after they observed a member was excluded, in the same condition. These processes were moderated by rejection sensitivity. Additionally, the examinations of cognition after rejection showed that participants' sex and rejection sensitivity effected on the response to facial expression. But the tendencies were not consistent with the results of previous studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1560,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：　集団過程　排斥行動　集団移行可能性

１．研究開始当初の背景

排斥後の対人関係について，近年様々な検討されてきた。その1つである，所属調整モデル（Gardner, Pickett, & Knowles, 2005）では，社会的排斥後に所属欲求を満たすための直接的・間接的反応をモデル化している。たとえば，排斥された人は，集団の他の成員の意見に賛成しようとすることが示されている（Williams, Cheung, Choi, 2000）。また，拒絶された経験の想起が，所属する集団アイデンティティの活性化を高めることを示している（Megan, Knowles, & Gardner, 2008）。このような反応を行うことにより，一時的に欠乏した所属欲求を満たすという戦略を行っているという。

しかしながら，所属調整モデルで示された短期的な適応戦略が，長期的には不適応を高める可能性が考えられる。親密な関係からいじめにあった場合，そのいじめにあった人が，その関係に固執し，他の新しい関係の構築を求めない，あるいは，いじめを観察している人がその関係の評価を下げず，いじめに加担することが，現実場面では散見される。

２．研究の目的

本研究では，上述した現実場面でみられような，排斥を行う集団に固執る傾向の説明を試みる。いじめられた人のみでなく，いじめに加担する心理過程について，所属調整モデル（model of belonging regulation; Gardner, Pickett, & Knowles, 2005)に基づき検証することを目的とする。

いじめの深化は，排他性の高い閉塞的な社会，社会移行の可能性が低い，もしくは低く見積もるという社会構造を背景としていると考えられる。そのため，集団移行能性に着目する。新たな集団に所属するもしくは，新たな関係を構築することが容易であるとする場合は，排斥集団への愛着は低下すると考えられる。一方で，集団を移行することが難しいと認知した場合，排斥集団からの受容はより重要なものとなるだろう。そのため，集団への愛着が高まる（低下しない）ことが予想される。これらの予測を場面想定法(1)・実験法(2)を用いて検討する。

加えて，初期的な認知においても，上記の予測を検討するため，基礎的な傾向を測定する(3)。DeWall, Maner, & Roudy (2009) は，拒絶された人は新たな関係構築のため笑顔に注意を向けるとしている。また，拒絶感受性（Downey & Feldman, 1996）がこれらの過程を調整することが予想される。

３．研究の方法

(1)-1. 66 名の女子学生（平均年齢 18.92 歳）を分析対象とした。拒絶感受性尺度（Downey & Feldman , 1996; 本多・桜井, 2000 の翻訳版）への回答を求めた。既存の計算方法に従い，得点を算出し平均値 11.11（SD = 3.04）によって，参加者を高群・低群に分類した。排斥されているクラス員もしくは一般的なクラス員を観察する場面のどちらかを想像してもらった。その後，そのクラス員に対してどのくらい受容的な態度をとるかに回答を求めた。

(1)-2. 85 名 の学生（男性 38 名，女性 47，平均年齢 18.49 歳）を分析対象とした。まず，参加者が所属する集団のうち，多数派集団もしくは少数派集団のどちらか一つをあげてもらい，その集団の特徴について回答を求めた(礒部他, 2005)。この尺度は，優勢性と均質性の下位因子からなる。それぞれの平均値に基づき，参加者を高群-低群に分割した。続いて，排斥-受容の観察場面の操作を行った。その後，集団表象尺度(中島他，2010)に回答を求めた。この尺度は common-bond group と common-identity group の 2 つの下位尺度から成る。

(2) 30 名の学生（男性 13 名，女性 17，平均年齢 18.49）を分析対象とした。実験室にて，まず，6 名からなるグループの 1 人であり，3 名で行うキャッチボールゲーム（サイバーボール課題（Williams et al.,2000); 6 セッション）にランダムに参加すると伝えた。参加者は 1 セッション目で友好的なゲームを観察, 2 セッション目はゲームに参加した後，3 セッション目で，ゲームに参加している一人が排斥される場面を観察した。また，移行可能性は,「今のグループが気に入らない場合は，他のグループに移ることが可能である」，もしくは「移ることができない」と伝えることによって操作した。セッション終了ごとに，集団愛着（4 項目，5 件法）への回答を求めた。実験は 3 セッション終了後で終わりとし，ディブリーフィングを行った。なお，拒絶感受性は事前調査時に測定した。

(3)-1. 大学生 48 名（男性 29 名，女性 23 名，平均年齢 19.7 歳）を分析対象とした。選択的注意課題は De Wall et. al. (2009) にならい，注視点 1,000ms 後に顔刺激対を 1,000ms 呈示した。顔刺激対とは，感情顔（怒り・笑顔・嫌悪）のいずれかと中立顔の 2 つを意味する。課題を行う前に，実験条件では「共同課題をする予定だった相手が，共同課題ができないと言っている」と伝え，統制条件では「実験者が急用で実験を中断する」と伝えた。なお，

拒絶感受性は事前調査時に測定した。
(3)-2. 大学生 74 名（男性 35 名，女性 39 名，平均年齢 18.3 歳）を分析対象とした。(3)-1 の問題点を汲み，選択的注意課題の刺激時間を 400ms（能動的な注意を測定できるとされている）に変更した。また，刺激呈示時間を 100ms（受動的な注意を測定できるとされている）とする課題への反応も測定した。課題前に，曖昧な拒絶条件の実験参加者には「理由はよくわからないが，もう一人の参加者が共同課題ができないと言っている」と伝え。一方，統制条件では，選択的注意課題だけに取り組んでもらった。

４．研究成果

(1)-1. 受容的態度得点において，場面（拒絶・統制）× 拒否感受性（高・低）の分散分析を行った。その結果，場面の主効果の傾向（F (1,65) = 3.93, p < .06）および，交互作用が認められた（F (1,65) = 4.19, p < .05, Figure 1）。拒絶感受性が低い群では場面による差が認められなかった（F (1,65) = .00, *ns.*）が，高い群においては場面により有意に異なることが認められた（F (1,65) = 7.77, p < .01）。この結果は，拒絶感受性が高い者は排斥場面により敏感であり，排斥行為に同調する可能性を示している。

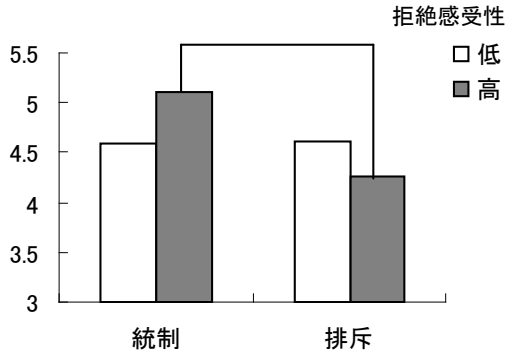

Figure 1　場面と拒否感受性が被排斥者への受容的態度に及ぼす影響

(1)-2. 集団表象のそれぞれの得点において，場面（受容-排斥）×集団優勢性（高-低）もしくは集団均質性（高-低）の分散分析を行った。その結果，common-bond 得点において，優勢性の主効果(F(1.82) = 8.17, p < .01)および交互作用(F(1.82) = 3.20, p < .10, Figure 2.)が有意である傾向が認められた。下位検定を行った結果，排斥場面において，優勢性による差が認められた。優勢性が高いと捉えている集団においては，内集団のメンバーが他のメンバーから排斥されている場面を想起することにより，集団を common-bond として捉える傾向が高まっていた。つまり，他者が排斥される場面を観察する（その場面の想起）だけで，所属欲求が高まる可能性があり，その過程は集団の優勢性が高く（移行によるメリットが低い），その集団への所属が自身のアイデンティティを高める場合において特に顕著であることが示唆された。

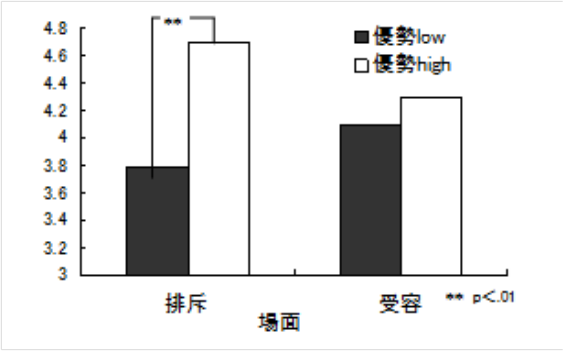

Figure 2 優勢性と場面が集団愛着（common-bond）に及ぼす影響

(2) 移行可能性の操作ではなく，実験中に参加者がどの程度容易に移動できると思っていたか，つまり移行可能性の認知を分析で用いた。集団愛着の変化量（セッション 3 からセッション 2 の平均値を引いた差得点）と移行可能性の認知および拒絶感受性との相関を求めた。その結果，移行可能性と集団愛着の差得点に有意な相関が認められた（r = .40, p < .05）。他集団に移行できないと思っていた人ほど，排斥の観察後後に愛着を低めにくいことが示された。これは予測と一致する結果である。排斥を観察した後においても，その他の集団に移行できないと思えば（実際にどうであるかに関わらず），その集団に居続け，結果として排斥行為が助長される可能性が示唆された。

拒絶感受性は，差得点とは相関が認められなかったが，セッション 2 とセッション 3 の集団愛着得点とは有意な相関が認められた（rs = .37, ps < .05）。拒絶感受性が高い人ほどキャッチボールゲームで友好的にパス回しをしてもらえると集団愛着が高まっていた。拒絶感受性は，受容に対してもより敏感に反応したといえる。

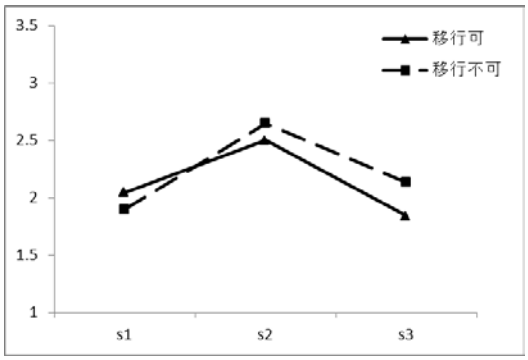

Figure3　移行可能性の条件ごとにおける集団愛着の推移

(3)-1. 統制条件において，拒絶感受性高群（HRS; 低群=LRS）は笑顔・嫌悪顔に注意を向けることが示された。一方，曖昧拒絶条件では，注意バイアスが示されなかった。この検討では，刺激呈示時間に 1000ms を用いていたため復帰抑制が結果に影響している可能性など，方法論上の問題点がいくつか考えられた。

(3)-2. 男性のみ, 統制条件において HRS の方が LRS よりも拒絶の顔から注意を回避する傾向が認められた(Figure4)。また，統制条件の 100ms においては顔刺激に関わらず注意を向けていた。これらのことから，統制条件において LRS 男性は, 拒絶の顔に対する警戒－回避パターンが働いていたといえる。つまり，HRS 男性は日頃，初期的な認知過程において拒絶を回避することにより，ディストレスを減らすという対策をとっていると考えられる。

一方，曖昧な拒絶操作を行った条件では，LRS 男性において拒絶の顔からの回避傾向が認められた。この結果は，先行研究の知見(e.g., Downey & Feldman, 1996) とは異なる。その理由として，LRS は，初期的な認知の時点で回避しているため，その後，拒絶に反応しないことが考えられる。先行研究では，高次の行動指標にしか着目されていなかったため，LRS は曖昧な拒絶に反応しないとされていた可能性が考えられる。しかしこの説明は，概念的には回避反応がより認められると考えられる HRS 男性, および女性においては回避反応が示されていないため，十分とは言えない。

さらに課題後に，内集団（同大学）の他者受容を検討したところ，拒絶感受性が高い男性・拒絶感受性が低い女性は，その他者に対する受容が高いことが示された(Figure5)。HRS 男性は社会的な受容獲得を動機づけられた結果だと考えられる。一方 HRS 女性は，他の条件より対象の評価が低かった。拒絶気分における男女差がないにもかかわらず，HRS 男性とは逆の反応を示した。

以上のように，本研究のそれぞれの結果，および先行研究を整合的に説明することは不可能であり, 今後さらなる検討が必要がある。

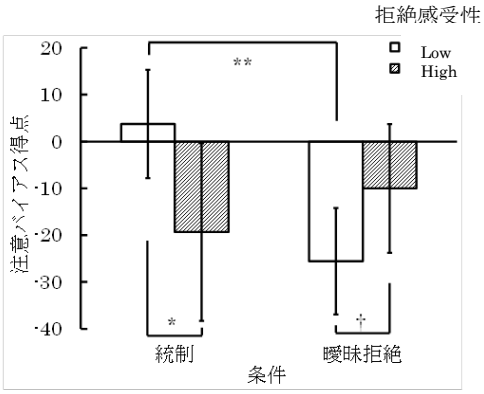

Figure4　男性参加者における、嫌悪顔への接近-回避（注意バイアス）に、条件と拒絶感受性が及ぼす影響

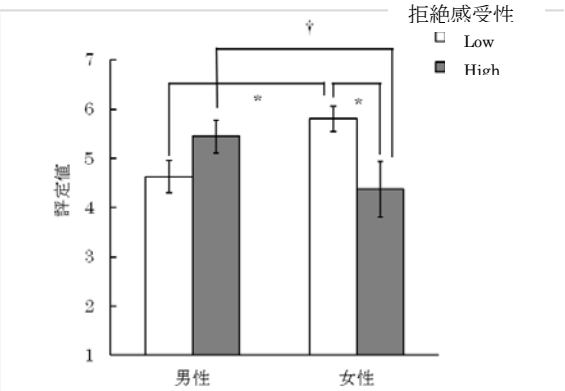

Figure5　対象人物への評価（能力がある）に性別と拒絶感受性が及ぼす影響

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 5 件）

1. 礒部智加衣 集団における排斥の観察が，その後の集団愛着に及ぼす影響　日本社会心理学会第 53 回大会 2012 年 11 月 18 日　筑波国際会議場
2. ISOBE, C., ENAMI, J., URA, M., & ORIMO, H. The predictors of managers' positive attitudes toward their organization. The 12th European Congress of Psychology 2011 年 7 月 The Istanbul Convention & Exhibition Centre
3. 礒部智加衣・浦光博・柳澤邦昭・中島健

一郎　　集団メンバーの排斥行為の観察がその後の集団愛着に及ぼす影響　日本社会心理学会第 51 回大会 2010 年 9 月 広島大学

4. 礒部智加衣・中島健一郎　排斥行動への加担における拒否感受性の影響　日本心理学会　第 74 回大会　2010 年 9 月　大阪大学
5. Isobe, C., Yanagisawa, K. & Ura, M Effecs of trust and self-esteem on attitudes toward a new group　2010 年 8 月　Melbourne Convention and Exhibition Center

６．研究組織

(1)研究代表者

礒部　智加衣（ISOBE　CHIKAE）

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：20420507

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：